

福島大学行政政策学類同窓会

阿武隈会報

第 31 号

発行年月日	令和7年9月1日
発行所	福島大学行政政策学類同窓会阿武隈会 〒960-1296 福島市金谷川1番地
発行人	小林 孝
編集者	堀江 正樹・須藤 達也 小椋純一郎・加藤 千里
題 字	大 谷 明 夫 (初代行政社会学部長)

「吐くから叶うへ」

阿武隈会会長

小 林 孝



同窓生の皆様におかれましては、日頃より阿武隈会の活動にご理解・ご協力いただき、心より感謝申し上げます。行政社会学部・行政政策学類で培われたものを活かし、様々な分野でご活躍のことと存じます。

さて、母校福島大学では、令和9年(2027年)4月に全学再編が予定されており、行政政策学類と経済経営学類が統合し、「政経学部」が新設されることとなりました。学類統合に合わせて、同窓会のあり方についても検討が必要と考えており、今後、経済経営学類同窓会等と協議していく予定です。行政政策学類のアイデンティティをどう引き継いでいくかなど、課題は多々ありますが、会員の皆様の忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

題名の「吐くから叶うへ」ですが、「吐く」という漢字は、「口」に「+ (プラス) とー (マイナス)」で成り立っています。つまり、口から出る言葉には積極的・前向きな「プラス言葉」もあれば、反対の、愚痴や不平不満の「マイナス言葉」もあるというわけです。

この「吐く」という漢字から「ー」を取ると「叶う」という字になります。普段から「プラス言葉」を意識し、思いや願いを叶えていきたいと思うところです。

学類再編等に対して、ややもすると「マイナス言葉」を発したい気持ちがあるかもしれませんが、ここは、プラスの言葉がプラスの出来事を呼び寄せると信じ、「プラス言葉」を意識しながら、「政経学部」が、同窓生よし、大学・学生よし、世間よしの「三方よし」の学部となることを叶えたいと考えます。

引き続き、阿武隈会が、同窓生にとっても、また母校にとっても、必要な存在となるよう努めてまいりますので、同窓生の皆様におかれましても、会の活動に関心を持っていただき、関わっていただけますよう心からお願い申し上げます。

多くの同窓生にご参加いただいている、総会・懇親会は、今年度も10月に開催いたしますので、ご出席いただければ幸いです。

結びに、福島大学行政政策学類の更なる発展を祈念するとともに、会員の皆様のますますのご健勝をお祈り申し上げ、あいさつとさせていただきます。

正に行政政策学類 の変化にあたって

行政政策学類長

今 西 一 男



阿武隈会会員のみなさま、こんにちは。本年4月より行政政策学類長を務めております、今西一男(いまいし・かずお)と申します。赴任は2000年4月で、今年度で26年目の教員生活を過ごしております。それ以前の卒業生・修了生のみなさま、初めまして。学類で担当している専門講義科目は社会調査論です。どうぞよろしくお願いいたします。それ後のみなさま、お元気ですか。レポートの再提出をさせる、あの社会調査論の今西です。アレが学類長か!と時代の変化を感慨深く思っていたければ幸いです。

時代の変化…確かに四半世紀を超えると様々な変化を目にするものです。私に関わった間にも行政社会学部が行政政策学類になり、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故に遭い、コロナ禍も経験しました。もちろん難局ばかりではなく、学び舎の日常的な楽しい思い出も多く積み重ねてきました。多くのみなさまは数年間でキャンパスを巣立たれたのでしょうかから、学部・学類、研究科の歴史の一コマを見たに過ぎない思いかも知れません。その点、教員はもう少し通史的に見ています。同窓会もそうしたコマとコマをつなげる役割を果たすものと思います。みなさまにとって学部・学類、研究科、そして様々な世代をつなぐ役割を、教員、阿武隈会が果たせれば、大変うれしく思います。

しかし、正に学類の変化として、みなさまに申し上げなければならないことがあります。既に本学ホームページや県内各紙の報道にありますとおり、2027年4月、本学類と経済経営学類を統合し、仮称「政経学部」への改組を行う準備を現在進めております。少子化に伴う18歳人口の減少、国立大学共通の諸資源の選択と集中が求められる状況に対応し、持続可能な研究・教育を実現するための改組となります。ただ、四半世紀以上の教員生活を捧げてきた愛着のある学類を統合というかたちで閉じる、おそらくその最後の学類長を務める複雑な心情を察していただければ幸いです。

これまでの学部・学類のよさを新学部を引き継ぐこと、それが会員のみなさまに対して果たしていかなければならない責務と考えております。阿武隈会も通じて改組の動向に関心をお持ちいただくとともに、建設的なご意見やご支援を賜れば大変うれしく思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

「最近の学生生活あれこれ」

行政政策学類 評議員 福島 雄一

阿武隈会の皆様には、今年も酷暑が続いておりますがいかがお過ごしでしょうか。今回もこの欄の執筆を担当します評議員の福島と申します。評議員生活も3期目6年になりまして、毎回同じ教員が書いていて、もう飽きてしまった方も多かろうと思いますが、お時間が許せばお付き合いいただければと思います。

そこで今回は最近少々気にしていた学生の皆さんの大学生活について思うところをつれづれに書こうかと思ひます。お聞き及びの方も多いと思いますが、今大学内で生活している教員、職員、学生など全ての人たちが多忙化しています。バブル景気の少し前にレジャーランドとマスコミに揶揄されていた頃に大学を卒業した身としては、まさに隔世の感があります。特に国立大学の教職員の多忙化については、最近はマスコミでも報道されますのでご存じの方が多いかと思ひます。その原因は、ズバリ窮乏化です。文科省からの運営費交付金が乏しいために、教育・研究・社会貢献といった学内業務を少ない人員で行わなければならない、また大学に求められる業務の量、内容、質もより高度なものが求められるようになり学内が疲弊しています。

さて、私どものことは横に置いておいて、学生の皆さんはどうでしょうか。それが、学生の皆さんも忙しいのです。行政棟の2階に学生談話室がありますが、月曜から土曜まで、朝の7時から夜の10時まで毎日熱心に勉強している学生の姿を見かけます。特に今の時期ですと、就活や公務員試験の時期が近づき、勉強する学生数は非常に増えます。学生の皆さんは大変でしょうが、わたしが一番好きな大学の風景かもしれません。行政の学生は真面目な方が多いことがよく分かります。このところの人手不足もあり、本学の就職は非常に順調ですが、やはりその成果は学生の皆さんの努力の賜物です。民間企業を目指す学生も、授業の合間に仙台や東京に就活の面接に行くという話をよく聞きます。面接があるので授業やゼミを休みたいということもよくあり、企業の姿勢としてどうかと思ひつつも、学生を応援したい気持ちに変わりはありません。

ただ、やはり就活と授業、ゼミや卒論の両立はなかなか大変です。現在の成績評価では期末に一度の試験で評価することが許さないために、複数回の試験や小テスト、レポートが学生に課されます。そして、これらの課題が同じ時期に複数の受講科目で

発生することが普通ですので、これは忙しいでしょう。わたしが本学に赴任した遙か昔には、学生が下宿先を探す時、生活やアルバイトに便利だからと南福島や福島駅周辺を探すのが定番でしたが、今は金谷川が人気と聞きます。なぜかと理由を尋ねると、学生は1限の授業があるからと聞きます。1限から授業にきちんと出ようということですから、これも立派です。このためかどうか、金谷川のアパートの相場は、部屋の仕様を考えると幾分か高めと思ひます。

その高い家賃やインフレで高騰する生活費、さらには授業料を工面するために学生の皆さんはアルバイトに励んでいます。奨学金を利用している学生も多くいます。アルバイトも昔は、家庭教師という話ばかり聞いたのですが、最近は飲食などを中心としたサービス業が多いように感じます。終業時間は自ずと夜の遅い時間になることも珍しくないようで、特に居酒屋などで働くと帰りが深夜という話もよく聞きます。ある意味昔の勤労学生のような生活をしているわけで、これは大変です。これにさらにサークル活動などを行っている人たちも多いのですから、忙しくなるわけです。このような忙しい生活が影響しているのか分かりませんが、特にコロナ禍以降、発熱や体調不良で授業をお休みする学生が目立ちます。

若い学生が、学業にアルバイトにサークル活動に励んでいるということは、それ自体は学生らしくすがすがしいという印象もありますが、大学での学習を進めるには、考える時間やアイデアを練る時間など余裕やゆとりが必要だと思ひています。また生活環境という意味では、食事でも大事です。以前に学生に聞くと生協のおにぎりの値段が上がったことが話題でした。確かに生協に食事に行くと以前よりも高くなったとわたしも感じます。最近、時たま中庭にキッチンカーが来るようになり、カレー、ハンバーガー、たこ焼き、カ



レーパンなどが食べられるようになり、生協のメニューに飽きた身としてはありがたいのですが、千円前後の価格設定が多く、学生向けともいえません。仲の良い学生に聞くと、食費を浮かすために一食抜いているというようなことを聞くとなんともいえない気分になります。大学生協も気にしたのか、その後にお手頃価格の小さなおにぎりを用意してくれたのは良かったです。

当たり前のことですが、大学もその中で暮らす学生、教職員も、景気やインフレなど経済的社会的な影響を受けています。こんな時代に大学が出来ること、すべきことは何かといえば、学生の学習環境と生活環境を整備するという事なのは言うまでもないでしょう。

また、学生の話聞いていて印象的なことは、休みの日など余暇に何をしているのかと聞けば、第一がアルバイト、次がやはりスマホをいじって動画を見たりゲームをしているということです。新聞を読むという学生はもう見ることはなくなり、テレビは見ないし、そもそも持っていないという学生が大勢となったことは知られていますが、その現実が確認できます。このような情報の取得ルートが若い人たちの政治意識や社会認識に影響を与えていることは容易に想像がつかます。忙しい学生生活の毎日の中でのささやかな楽しみについて、大学教員をしているとついあれこれ分析めいたことを考えたりするから嫌われるのかもしれない。別に良いじゃないですかといわれそうです。

それでも、社会で様々議論されていることは、学生の皆さんの日々の生活に密接に関係しています。日本経済のインフレ化傾向が、学生の大学生活での生活費、奨学金、アルバイトなどに関連しますし、今侃々諤々議論されているトランプ関税は将来の学生の就活に影響する可能性があります。

学生だからと特別に扱うということ、若い世代に対する社会の寛容な姿勢や態度がだんだんとなくなってきたしまい、大学生生活も社会生活と連続した一体化したもののようになってきています。大学は企業化し、そこでの構成員の生活も企業的なものが求められます。大学での自由という内容は人によりいろいろあるかも知れませんが、勉強したいことに専念でき、じっ

くり考える余裕が大学生には必要だと思います。大学での研究は、予定通りに進むとは限りませんし、うまくいくとも限りません。試行錯誤やそれに見合う努力が必要です。そのために集中し、考える余裕が必要です。大学で研究に打ち込む経験はこれからの人生にも意義があると思います。鶏が先か云々という話のようですが、余裕のなさが今の日本社会の大きな課題かと思っています。時間の余裕、お金の余裕、心の余裕といったものは有意義な人生を送るためには重要なものでしょう。しかし、こういった問題、特に教育問題はあまり投票に結びつかないので、政治家の関心はこれまでは薄いものでした。教育は家庭の問題という意識が強かったように思います。

ただし、社会は動いています。教育問題が急速にクローズアップされるようになりました。政治家の皆さん、どうした心境の変化でしょうか。教育問題が票に結びつくとの政党も考え出したのでしょうか。

例えば、高校の無償化ということが政治マターになりました。大阪で始まったこの政策は、どうせ無償ならば設備が立派な私学に行こうという傾向を生み、公立高校の定員割れという副作用を生じ、政策とは実際にやってみないと分からないものだという教訓を生み、この政策が全国に広がり、お金の余裕のある家庭は無償化分が塾代に回るんじゃないかという疑念を生みつつも一つの政策として成立しています。結果として、所得制限なしで公立高校は無償化されています。2026年には私立高校の授業料相当分が給付されますので、私立高校も実質的に無償化され、高校の無償化が完成します。

この無償化の流れは大学にもやってくる様相です。各政党は大学の学費負担の軽減を政策テーマにあげています。その際に高校の時のような副作用が気になります。元々学費が高額なことがあり、一部の私学などでは、給付型の奨学金を用意し、低廉な寮を用意するなど独自の対策を始めている大学も出てきています。入試の区分として、生活困窮家庭を対象に、入学後に大学の職員として働けるというプランを用意している大学もあります。ところが、文科省の大学に対する運営費交付金が増額される見込みがなく、いくつかの国



立大学では、現行制度では10パーセントまで学費を上げることが出来るので、逆に学費値上げに走るところが出てきました。選挙公約でほとんどの政党が学費負担の軽減を主張しているの、選挙結果にかかわらずこの政策が進むと思うのは早計かもしれません。これまでも選挙公約がどこかに行ってしまう経験を国民は何度もしていますし。この先に学費が上がったり、下がったりどうなるのでしょうか。

少し前まで活発に議論されていた、所得税の控除額の103万円の壁ですが、160万円の壁になって、これは大学生は今までよりももっと働けますよというメッセージにも見え、大学生の余裕はもっとなくなるのかなという疑問もあります。学生アルバイトは本分ではないですが、それがないと学生生活を続けられないジレンマです。人手不足の今、ある業界の賃金が非常に高くなっていることがあり、大学に行かずに高校を出て働くという選択肢もありますし、高等教育にお金をかけても社会的にはあまり効用はないという考え方もあり、高等教育のあり方や必要性という論点につながります。

学生の皆さんが余暇に楽しんでいるスマホのSNSを規制しようという動きも最近注目されています。先陣を切ったオーストラリアで始まったTikTokやInstagramなどのSNSの法規制「オンライン安全改正法」(ソーシャルメディア最低年齢法)ですが、16歳未満を境目にして適用するので、大学生は関係ないといえそうですが、SNSに問題があるということであれば、それは大学生にも影響はあるのかなとも思います。このSNSの法規制ですが、フランスを中心にして欧州でも議論が広まっており、こちらは15歳以下のSNS利用を規制するものです。SNSの過度な利用は、若者に有害な行動をもたらし、精神的・心理的苦痛を伴い、健康や学業に支障をもたらすと考えられ、世界中の規制機関が注目している政策で、その行く末を見守っています。そもそもはSNSに触る時間が非常に長いということが問題なのですが、アカウントの登録時に嘘をついて登録するなどということはどう防ぐのかといった規制方法も注目されています。SNSを視聴する時間の長さだけではなくて、いわゆるウサギの穴と呼ばれるSNSが自分の見たいものだけを見るということにつながるが多く、このことが問題という認識も大分社会的に共有されてきたようです。これらの規制も十代に対するものですが、上の世代も注

意すべき課題かと思います。オンラインゲームについても、中国でゲームを遊ぶ時間が規制されることが話題になり、近年我が国でも、依存性などの弊害防止のため、条例で子供のゲーム時間を規制したり、大人についても、常習性や賭博などの関連でオンラインゲーム規制が議論されています。若者の生活に大きな影響があるこういった新しいメディアについても、注目する必要があると思います。

いくつか思いつきで、近年の注目されている政策などに触れましたが、政策が若者に向き始めているように思えます。やっとな若い世代の問題が公の場に出てきた感があります。ただし、難しいことは、ゆとりのない大人が、若者にゆとりをもたらすことが出来るのかというパラドックスではないでしょうか。大学が完全に世間と隔絶したユートピアのような機関として運営できるとは思いませんが、そうであっても、教育機関である大学ぐらいは、学ぶ意欲のある学生が余裕を持って研究できる環境を持ち、民主的に運営され、若者が有意義な時間を過ごせるというような建前が生き残って欲しいです。社会がそうでないのならばなおさらに、大学にはそうあって欲しいです。文科省は、特に国立大学を日本の産業の復興の起爆剤にしたいと繰り返し主張しています。大学がイノベーションの拠点として産業政策の一部になることとは別に、若い学生の皆さんが人生で最も楽しい時間を過ごすことができる場であるということも忘れてはいけないように思えます。

冒頭に書きましたように、わたしの評議員の任期は今年度で満了しますので、この場で皆さんにお目にかかることは最後になるかと思います。現在進行している計画では、令和9年度を目処に行政政策学類は経済経営学類と合流して政経学部になります。名称や見かけは変わりますが、福島県を拠点に教育研究活動をすることはなにも変わりません。どうか今後ともご支援いただけますと有り難く存じます。



● 会員からの近況報告 ●

「桃とゆげおと
いで湯の里と」

12期生

安齋 秀俊

みなさん、ご機嫌いかがでしょうか？

2003年3月に行政社会学部応用社会学科の夜間主コースを卒業してから22年以上の月日が流れました。時間が経つのは残酷なほど早いものですが、多少身体にガタはきつつも、無事に歳を重ねられていることに感謝しています。

大学卒業後、約10年間のサラリーマン生活を経て、2013年から地元の福島市飯坂町で果樹農家として働いています。主に桃とりんごを作っています。

「冬は暇でしょ？」とよく言われますが、意外にも(?)年間の完全な休日は30日ありません。朝4時から畑に出て、夜は事務作業に追われる。そんな繁忙期の忙しさは、厳しく、時に苦しいものです。

それでも、その時期を乗り越えれば、自分で時間の調整ができるので、今の仕事環境は嫌いではありません。そして、お客様の笑顔を見ると、苦労が報われた気持ちにもなる、最高の仕事です。

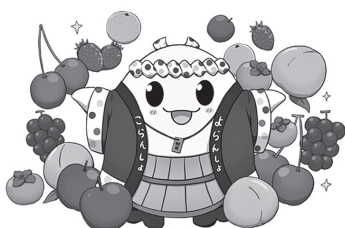
私はこの仕事に誇りと理想を持って向き合っています。美味しく安心な果物を、なるべく安くお客様の手元に届けたい。この思いは、昨今の物価高の中でも大きなテーマで、時代に抗い、将来の農業のカタチを探求しながら、日々を過ごしています。

仕事以外では、飯坂町のまちづくりにも携わっています。知らない方は知らないが、ゆるキャラマニアなら知っている(はず?!)、飯坂町のマスコットキャラクター「ゆげお」の誕生に関わりました。私にとって3人目の子どものような「ゆげお」は、今年7月に6歳を迎え、イベントなどでも多くの声援を浴びる存在に成長しました。

「ゆげお」を通じて飯坂町を広く知ってもらい、人との繋がりや地域の人々の活躍の場を生み出すことを期待し、これからも活動を続けます。

仕事もまちづくりも、私には大学生時代に培った「モノの考え方」が根幹にあります。福島大学の仲間と熱く語り合ったあの頃を…と、ちょっと盛りがちに思い出しつつ、あの頃に感謝しながら、私は今を生きています。

当時のゼミ生や共に講義を受けた仲間、この文章を読んでくださる同窓生の皆様と、いつかどこかでお会いできることを願い…、いえ、飯坂温泉の湯煙漂うほとりで、いつか笑顔でお待ちしています。



飯坂町マスコットキャラクター「ゆげお」

「不惑には程遠い」

18期生

成田 衛

大学卒業以来、製造業である現在の会社に勤めて早16年目となった。

根っからの文系である私が油圧機器を用いた産業機械を製造する企業に未だに所属しているとは不思議なものである。

技術面については業務の中で経験を重ねながら覚えてきたが、あくまでも普通の人よりは詳しい程度であり設計や直接製造に関わるスタッフからすれば初心者も同然である。

もちろん営業ということもあり、客先との交渉やクレーム処理などなかなか根気のいる業務もあるがなかなか満足行くまで成長していない。おそらくこれは“人たらし”ではないとプロフェッショナルになれないのではと考えているほど私は遠い位置におり、行き詰まりを感じている中で日々研鑽を積んでいる。

私生活とはいえば、割と多趣味なところがあり写真の通り趣味の一つとしてサイクリングがある。学生時代から続いている趣味であり、世間がコロナで騒がれていたころまでは一人でできる活動ということもあり毎月数百キロ走りこんでいた。

今でも仲間とともにイベントに参加したり仲間内で走っていたりワイワイ楽しんでおり、写真も7月のイベントにて暑さと体重増加で苦しみながら100kmを完走した後に撮ってもらったものである。

加えてここ数年で盆栽にも手を出し始めてしまったのが良くも悪くも悩みである。

日々の水やり害虫・病気対策など程よく世話が必要であり手間がかかる。

一方で私が育てている桜やクチナシは春から初夏に花が咲き、夏には青々と葉が茂り、冬になれば落葉するなど小さな鉢の中で日々些細な変化が訪れ、忘れかけていた四季を感じさせてくれるのが趣深い。

また、5年、10年先の枝ぶりを見据えて剪定を行うと思うと、作業中に自分の将来もおのずと物思いにふけてしまう。

仕事に趣味に悩みあれもこれもと手を出しているうちにいつの間にやら来年は40歳になってしまう。

少しは余計なものを整理して不惑に近づきたいものである。



行政政策学類 教員19名の執筆による 「大学的福島ガイド」を刊行

令和 6 年 10 月、昭和堂が刊行する「大学的地域ガイド」シリーズの一冊として、『大学的福島ガイドーこだわりの歩き方』が出版されました。本書は人文・社会科学の諸分野にわたる幅広い専門性を有する行政政策学類の強みを遺憾なく発揮し、福島県内の各地をフィールドに、専門的かつ多角的な視点から福島県を捉え、読者を探究の現場へと誘います。

法・行政・政治・社会・歴史・文化の幅広い専門性と学際性を特徴とする行政政策学類の 19 名の教員が執筆しています。福島県内の身近な地域をフィールドに、高校生や一般の方にもわかりやすいかたちで、大学の学びや研究成果を紹介しています。ぜひ一読ください。

<https://www.ads.fukushima-u.ac.jp/topix/2024/10/013181.html>

新藤雄介准教授が 日本図書館情報学会賞を受賞

令和 6 年 9 月、新藤雄介准教授が日本図書館情報学会賞を受賞しました。受賞対象となったのは新藤先生の著書『読書装置と知のメディア史：近代の書物をめぐる実践』（2024 年、人文書院）です。

本書は、日常における書物と人びとの関係を捉えることを目的に、近代日本の地域の読書装置、書物をめぐる実践、地域社会と地域組織のつながりといった課題を設定し、図書館史・読書史・メディア史を横断する理論的枠組みを考究した研究書です。

2024 年度日本図書館情報学会学会賞選考委員会報告受賞理由

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jslis/71/1/71_74/_pdf/-char/ja

岩崎由美子ゼミが西会津町より 特別感謝状を受賞

令和 6 年 11 月、岩崎由美子ゼミは福島県耶麻郡西会

津町から町制施行 70 周年記念として特別感謝状を受賞しました。

岩崎ゼミは、西会津町をフィールドとして中山間地域と都市農村交流や大学生の視点を生かした農山村集落活性化活動の支援など永年にわたって取り組んできた功績によるものです。

<https://www.ads.fukushima-u.ac.jp/topix/2024/12/013346.html>

総務省福島行政監視行政相談 センターと連携協定締結

令和 7 年 3 月、行政政策学類では福島行政監視行政相談センターとこれまでの連携・協力関係を発展させるため連携協定を結びました。かねてより行政政策学類では西田奈保子教授が担当する各種演習での調査研究への協力、講義での講演等でセンターとの連携を行ってきましたが、今回の協定締結によって行政相談制度についての啓発活動、学生のキャリア支援、調査研究活動の支援等での両者の協力関係の発展に結びつくことが期待されます。

具体的には、住民と行政の間を繋ぐ機能をもつ行政相談委員等の地域の担い手層の在り方や行政課題の解決の在り方を学ぶことをきっかけに、将来の地域社会や行政の望ましい姿を構想し、その実現に向けて行動できる力の獲得を促進したいと考えており、行政相談委員の方々に聞き取り等にご協力いただくことを通して、職業生活と地域生活との関連性を知る機会につながります。

また、福島行政監視行政相談センターで働く国家公務員の方々の講義等を通して、公務のやりがいや働き方に関する理解を深める機会にもつながります。このような経験により、学生自身が広い意味でのキャリア形成を考え、充実した大学生活を送ることにつながればと思います。

今後、この協定をきっかけに全学的な協力関係につなげていくことができればと学類では考えています。

<https://www.ads.fukushima-u.ac.jp/topix/2025/04/013737.html>

教 員 異 動

日 付	職 名	氏 名	専門講義科目等	異 動 内 容
R6.9.30	准教授	板 倉 有 紀	地域社会学	退職（岩手県立大学へ）
R7.3.31	教授	長谷川 珠 子	労働法	退職（岡山大学へ）
R7.3.31	准教授	新 藤 雄 介	メディア論	退職（早稲田大学へ）
R7.3.31	特任教授	後 藤 史 子	比較文化論	退職
R7.4.1	教授	今 西 一 男	社会調査論	学類長（～ R9.3.31）
R7.4.1	教授	坂 本 恵	言語文化論	教育研究評議会評議員（～ R8.3.31）

総会・懇親会開催

令和6年10月26日(土)、「福島大学行政政策学類同窓会阿武隈会」の総会及び懇親会が、福島市のホテル福島グリーンパレスにて開催されました。当日は、卒業生約30名と現職・元職の教員4名が全国各地から集い、旧友との再会を喜び合いました。

総会では、まず昨年度の活動報告と収支決算の説明の後、本年度の事業計画案と予算案が説明され、満場一致を持って承認されました。また、令和6年度は役員改選の年となっていることから役員改選(案)が提出され、会長・副会長を始め、各理事が再任されたほか、新たに役員1名が選任され、同窓会運営体制が強化されました。

続く懇親会では、小林孝阿武隈会会長のあいさつに始まり、来賓の高橋準学類長による乾杯の音頭で幕が開きました。各テーブルでは懐かしい話題や近況報告が飛び交い、大いに盛り上がりました。卒業以来の再会に笑顔がこぼれ、世代を越えた交流が繰り広げられました。

中盤には、来賓の先生方から近況報告を兼ねた御挨拶をいただき、懐かしい学生時代の思い出話にも花が咲きました。現役学生を代表して参加した、学友会学

生部会執行委員会の水口瑛太執行委員長から最近の金谷川キャンパスの状況や学生生活・学生活動の報告があり、先輩となる同窓生の皆さんは、現役学生のスピーチに大変刺激を受けていた様子でした。

終盤には記念撮影が行われ、笑顔にあふれた一枚が撮影されました。参加者からは「また来年も必ず参加したい」といった感想も聞かれ、同窓会の意義と絆の深まりが改めて実感されました。

今回の開催に際し、多忙な中ご参加いただいた同窓生の皆さま、来賓として駆けつけていただいた先生方に心より感謝申し上げます。



卒業記念パーティーという伝統の存続に向けて

令和6年度 卒業記念パーティー実行委員長 3年 水口 瑛太

令和6年度卒業記念パーティーを無事に開催できたこと、まずは心より御礼申し上げます。阿武隈会同窓会の皆様、ホテルグリーンパレスの皆様、教職員の皆様、そして本イベントに関わってくださったすべての皆様のご支援、ご協力があったからこそ、このような場を実現することができました。学生部会を代表し、この場をお借りして厚く感謝申し上げます。

この卒業記念パーティーは、コロナ禍を経て今年で3年目を迎えました。感染症対策が求められる中でも、開催方法を模索しながら実現してきた先輩方の姿を、私たちは近くで見えてまいりました。その努力の積み重ねの上に、私たちの活動があるのだと、イベントが終わって改めて実感しております。特に、「感染対策」と「参加者の満足度向上」という難しい課題を両立しようとする真摯な姿勢は、私たちの手本となり、現在のパーティーの在り方にも大きく反映されていると感じています。

今年度、私たち実行委員会が重点を置いたのは、「どのようにすれば学生が参加したくなる雰囲気をつくれるか」という点でした。近年、学生のイベント参加率が低下傾向にある中で、まずは周知・広報活動を徹底しました。ポスター掲示やライブキャンパスでの告知、SNSを通じた発信など、あらゆる手段を用いて情報を届けることを心がけました。また、卒業生や教職員の方々にもお声がけし、口コミや個別の呼びかけによって、関心を持ってもらうきっかけを広げていきました。

内容面でも、参加者の皆さんが参加してよかったと思えるよう、企画を練り上げました。たとえば毎年恒例のスライドショーでは、学友会やゼミ・サークルから卒業生の在学中の写真を提供していただき、学生生活を振り返る心温まる映像を制作・上映しました。また、ビンゴ大会では、教職員の先生方が卒業生への想いを込めて景品を選んでくださり、大いに盛り上がる時間となりました。

当日の会場では、たくさんの卒業生や教職員の皆様にご参加いただき、和やかで温かな空間が広がっていました。仲間と過ごした日々を懐かしむ笑顔、恩師に

感謝を伝える言葉、未来への希望を語り合う姿など、会場のあちこちで心に残る光景が見られました。この卒業記念パーティーが単なる「イベント」ではなく、学生生活の集大成として大きな意味を持っていることを、改めて強く感じました。

この活動を通じて、私は「人とのつながり」の大切さを感じました。学友会の中では、どのようにすれば参加者を増やせるか、何度も議論を重ね、試行錯誤を繰り返しましたが、その過程で、コロナ以前の活動を知る同窓会の方々や、ホテルの担当者様から多くのご助言をいただき、形にしていけることができました。また、教職員の先生方や卒業生の皆様に直接ご協力をお願いする中で、関心が少しずつ広がり、参加意欲が高まっていく様子を肌で感じるすることができました。このように、関係するすべての方々がこの行事を「自分ごと」として捉え、支えてくださったことに、心から感謝しております。

今後、学類の統合や制度改革などにより、学生生活の環境は大きく変化していくことが予想されます。しかし、どのような変化の中にあっても、この卒業記念パーティーという伝統の本質——すなわち、仲間や恩師と想いを共有し、感謝と希望を胸に旅立つ節目の場——は、決して失われてはならないものだと思えます。たとえ形式や名称が変わったとしても、来年度以降もこの意義を大切にしながら、後輩たちがこの伝統をしっかりと引き継いでほしいと考えております。

最後になりますが、このような意義ある行事に執行委員長として携われたことを、私は誇りに思っております。至らぬ点が多かった私を支え、力を貸してくださった関係者の皆様、そしてあたたかくご協力いただいたすべての方々に、改めて深く御礼申し上げます。

そして今年度の学生部会の活動につきましても、引き続きご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。この経験を次の世代へとしっかりと引き継ぎ、多くの学生がこの伝統を誇りに思いながら、豊かな学生生活を送れるよう願っております。

● 令和 6 年度会務報告 ●

■ 令和 6 (2024) 年

- 6 / 8 理事会 (新年度予算、事業方針等)
9 / 1 会報第30号発行
10 / 26 総会・懇親会 (於: 福島グリーンパレス)

■ 令和 7 (2025) 年

- 3 / 2 理事会 (年度振り返り、次年度方針等)
3 / 25 卒業記念パーティー ※学友会と共催

● 役員名簿 ●

※令和 6 年度改選、任期は令和 8 年度総会まで

会 長: ★小林 孝

副会長: ★鈴木 敬 ★小椋純一郎 ★堀江 正樹

理 事: 渡邊 弘利 ★加藤 千里 矢内 祐紀

★香野 雅之 小林 良平 浅野 直彦

若松 麗葉 高橋 裕樹 須藤 達也

高橋あゆみ 松本 学

監 事: 田中 康治 鈴木 貴士

注) ★は福島大学同窓会(全学同窓会)役員を兼務

● 個人情報管理について ●

- 会員情報は、本会会報・各種行事案内の送付の目的でのみ使用し、会員名簿を紙や電子媒体で発行・頒布することはありません。
- ただし理事会での議決に基づき、学内諸団体へ情報を提供することがありますので、ご承知おきください。その際は、紙媒体で情報提供を行うことを原則とし、本会ホームページ等で提供を行った旨を広報いたします。
- なお、同窓会という性格上、ご本人からの希望であっても「会員名簿からの削除」は行っておらず、「連

絡先情報の削除」にて対応いたします。ご希望がある場合は、本会ホームページの「お問い合わせ」からその旨をご連絡ください。

会員状況 (令和 7 年 7 月 1 日現在)

<正会員>

(単位: 人)

行政社会学部 (※ 1)	4,554
人文社会学群 行政政策学類 (※ 2)	3,713
人文社会学群 現代教養コース (※ 3)	407
(小計) 学部・学類	8,674
地域政策科学研究科	212
地域デザイン科学研究科 地域政策科学専攻	2
(小計) 大学院	214
合計	8,888

<参考 (在学生)>

(単位: 人)

人文社会学群 行政政策学類 (※ 2)	898
(小計) 学類	898
地域政策科学研究科	5
地域デザイン科学研究科 地域政策科学専攻	9
(小計) 大学院	14
合計	912

(※ 1) 昼間主コース、夜間主コースの合計

(※ 2) 昼間、夜間主の合計

(※ 3) コミュニティ共生モデル及び法政策モデルの卒業生のみ



～ 阿武隈会ホームページについて ～

- 阿武隈会ホームページは、令和 6 年 9 月にリニューアルしました。
- ホームページでは、学類に関するお知らせのほか、写真館・会報バックナンバーなどを掲載していますので、ぜひご覧ください。
<https://dousoukai.site/abukumakai/>
- 本会では、会報やイベントのご案内などを確実にお届けするために、連絡先住所の登録をお願いしています (登録のない方については、在学時に登録されていた帰省先の住所へ情報をお送りしています)。登録は、ホームページの「各種届出」⇒「住所等変更」からお願いします。
<https://dousoukai.site/abukumakai/various-notifications/change/>
- また、本会へのご意見・ご質問などがありましたら、ホームページの「お問い合わせ」からお願いいたします。

【トップページ】



【住所等変更】

